

イケチョウガイの給餌飼育について

幡野 真隆

1. 目的

真珠母貝（イケチョウガイ）の種苗生産では稚貝を漁場の湖水をかけ流して飼育されている。しかし、漁場の水は餌料が多く含まれる反面、夏季には餌料濃度が低下して成長遅滞が起きるなど、不安定要素もある。そこで、安定的な種苗生産手法を検討するため、イケチョウガイ稚貝の給餌飼育を試みた。

2. 方法

内径 15.4cm の塩化ビニル製パイプとソケットを改造して作成したエアリフト式のアップウェリング容器に目合 180 μ m の底面ネットを張り、粒径 0.3~0.5mm の底砂を薄く敷き飼育容器とした。6 月 14 日から 6 月 28 日にかけて容器内にイケチョウガイ脱離稚貝を約 700 から 3,500 個収容し、1 トン水槽に設置した。水槽内はろ過湖水を約 600L 満たし、1 日あたり約 100L の換水率で注水した。水槽をヒーターで 20~27°C に加温した。餌料は飼育初期には水産試験場で培養したクロレラの 1 種（以下培養クロレラ）を給餌し、約 2 週間かけて次第に市販の濃縮クロレラ（クロレラ工業製 V-12, 以下市販クロレラ）に切り替えた。餌料はチューブポンプとタイマーを用いて 1 日あたり複数回に分けて給餌した。10 月 24 日ならびに 11 月 6 日に取り上げを行い生残数と平均殻長を測定した。

3. 結果

試験終了時の生残率は 6~26% となり平均値は $17 \pm 8\%$ (平均 $\pm$ 標準偏差) であった (図 1)。また、生産された稚貝の平均殻長は 8.2 ± 1.7 mm から 10.1 ± 1.8 mm であった (図 2)。真珠母貝の種苗生産では収容した稚貝の歩留まりは 1 割程度とされており、本

試験での歩留まりはそれを上回っていた。また、1 例ながら西の湖で掛け流し飼育した場合は 4% であり、給餌飼育よりも低かった。一方、平均殻長は西の湖の方が給餌飼育よりも有意に大きかった ($P < 0.01$, 多重比較による Sheffe の F 検定)。以上のことから、イケチョウガイの給餌飼育が可能であり、高い生残率を得ることが可能であった。しかし、平均殻長は掛け流し飼育よりも小さかったことから、今後はより大型種苗を生産するための給餌量等を検討する必要がある。

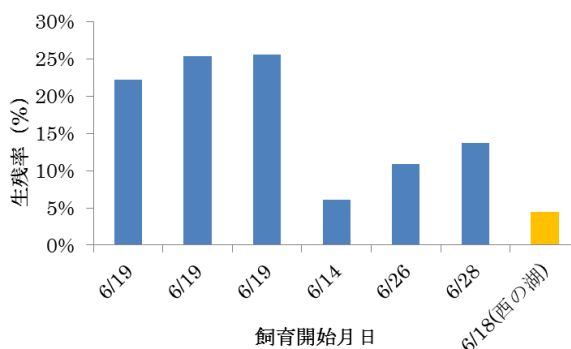


図 1 試験終了時の生残率

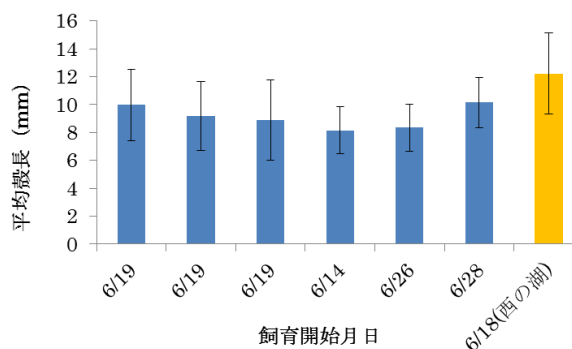


図 2 試験終了時の平均殻長